上北地区統合校開設準備委員会（第２回）概要

日時：令和元年７月２９日（月）
１０：００～１１：４５
場所：サン・ロイヤルとわだ　２階　孔雀の間

＜出席者＞

〇委員

齊藤　聖一 委員、水尻　和幸 委員、吉田　繁徳 委員、岡田　寛紀 委員、遠藤　剛 委員、沼山　喜久男 委員、丸井　英子 委員、瀧口　孝之 委員、長谷川　光治 委員

〇オブザーバー

県立十和田西高等学校

田中　正也 教頭、山田　義光 事務長、福島　智 教務主任

県立六戸高等学校

奈良岡　隆樹 教頭、上村　奈加子 事務長、種市　誠 教務主任、

県立三本木農業高等学校

太田　良孝 教頭、柴田　富由紀 事務長、佐々木　伸介 教務主任、佐々木　篤 農場長

１　開会

２　事務局説明

（１）第１回上北地区統合校開設準備委員会における主な意見

■　事務局から資料１により第１回上北地区統合校開設準備委員会における主な意見について説明した。

■　委員から次のような意見があった。

〇　現在の三本木農業高校は農業経営者育成高校であり、これは今後も続くと思うが、それに加え、食品科学科も新設されるようである。このことから資料１の学校像の項目には、加工に関する内容も入れる必要があると感じた。

また、学校像の項目の３つ目のマルに「十和田市は、観光と農業を基幹産業としている」との記載があるが、三本木農業高校に対する私たちの捉え方としては、十和田市というよりも上十三地域や県南地域というものであり、一つの市町村というよりも広い位置付けが必要だと考える。これは委員の意見なので批判するつもりはないが、十和田市を将来の学校像の中心に考えていくのはどうかと思う。

→（事務局）資料１は第１回委員会における委員の意見をまとめたものとなっている。この記載は、開設準備委員会における学校像の方向性としてまとめたも

のではなく、それぞれの意見を掲載している。

３　意見交換

（１）特色ある教育活動の方向性について

■　委員長から事務局に対し、特色ある教育活動の方向性に係る意見交換の進め方等について説明を求め、事務局から資料２により「上北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動」及び「上北地区統合校の新たな特色ある教育活動」の２つの論点で意見交換する旨説明した。

①上北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動

■　委員長から委員である各校の校長に対し、各校から提案のあった「上北地区統合校に引き継ぐべき特色ある教育活動」について資料２により説明を求めた。

○十和田西高校（齊藤委員）本校の特色は観光を通して３年間様々な学習をしていることに尽きる。観光関係の進路を目指すということではなく、観光の学びを通した人づくりをしており、コミュニケーション能力や郷土を愛する心等が育まれていくものと考えている。

本校からの提案内容として、十和田奥入瀬文化観光認定ガイド養成講座により、１年生の段階で１年かけて郷土について勉強することとしている。また、２年生の段階で観光客に前年度の郷土の自然環境学習や地域に関する探究学習の成果を披露する機会として、奥入瀬エコロードツアーでのボランティアガイドを担い、コミュニケーション能力の育成を図っているところである。さらに、ボランティアガイドの際、事故に遭遇する場合を想定して救命救急講習（上級）を受講している。ＡＥＤの取扱い等について、十和田湖消防署の全面的な協力のもと指導していただいている。

また、十和田市秋祭りでは、流し踊りに参加しているので、地域活性化の一助になればと考えている。

なお、資料には記載していないが、今年度新たな取組として、これまで２年生までで完結していたボランティアガイドについて、増加している外国人観光客への対応を目標に、３年生の希望者が中心となって英語で観光ガイドする取組を７月に実施した。これは地域に派遣されているＡＬＴの協力によるもので、これまでの日本語による説明内容を英語で説明することに挑戦している。

観光を題材に生徒の成長を願うということを観光科で実施している。

○六戸高校（吉田委員）本校の特色ある活動として、教育課程上にボランティア活動の評価を位置付けており、メイプルボランティアという名称で学校設定科目となっている。取得要件を満たせば学年ごとに１単位を認定している教育活動である。齊藤委員からも発言があったが、ボランティア活動は普通科のみならず学校の教育活動の中で大きな意味を持たせることができると考えている。本校のボランティア活動を統合校の教育活動に取り入れていただきたい。

もう一つは、総合的な探究の時間において、本校近くの舘野公園内にある、さつき沼をビオトープ化する活動を行っている。これは今年度から六戸町、北里大学との協働で１年生が取り組んでいる。８月２０～２１日に開催される、六戸町の小学校３年生から６年生を対象とした六戸探検隊という催しに本校１年生が加わり、舘野公園の自然環境調査をサポートする予定である。

ビオトープの観点からは、十和田市の一本木沢、六戸町の舘野公園さつき沼、三沢市の仏沼の３つの地域をつなげるとその中心に統合校があり理想的な教育環境が作れると思う。

〇三本木農業高校（遠藤副委員長）現在、本校には農業に関する学科が５学科あり、そのうち３つの学科が統合時に改編される。３つの項目を提案したが、現在の５学科をベースにしながらも将来を見据えてお話ししたい。

地域連携について、十和田西高校、六戸高校も地域と連携した取組を実施しているが、本校は農業をベースに様々な取組を実施している。資料には、きみがらスリッパの製作を挙げたが、それ以外にも染物に使用している「十和田むらさき」の保存活動や青森県のシャモロック原種鶏の分散管理も行っている。また、環境土木科においては地元の建設業協会と連携した測量技術等の学習、農業機械科においてはドローンやＩＣＴを活用した農業の研究を行っている。これらの取組によって地域人財の育成を目指しているところであり、統合校においても、農業や農業関連産業に従事する人財を含め、この地域を支えていく人財の育成を引き継いでほしい。

農場見学及び農業体験学習の受入れについて、幼稚園児や小学生等が来校した時に本校生徒が指導するなどの活動を行っている。人に教えるということは自ら学ぶことにつながっており、このスタイルを継続していきたいと考えている。

本校には農産物を販売するアンテナショップを設置しているが、新たに食品科学を扱う学科ができることから、農業の６次産業化を更に拡大できるよう新しい学科に引き継いでいきたいと思っている。

ここに記載しているものは主に農業に関するものであるが、普通科においても可能な部分で連携しながら、現在行っている良いものを引き継いでいけば良い。

■　他に考えられる教育活動として委員から次のような意見があった。

〇　十和田西高校、六戸高校の取組は良いと感じたので、このまま引き継げれば良いと思う。ただ三本木農業高校の取組はこれだけではないはずである。私は同窓会長を１０年位務めているが、まだ三本木農業高校の活動の全てを知らない。三本木農業高校は、十和田西高校、六戸高校にもない、農業高校としての特色ある教育活動を当然行っていると思うので、新しい学校の特色を話し合う機会において、三本木農業高校の教育活動についてもっと内容を記載して皆さ

んに伝えるべきである。私の考えでは、三本木農業高校には教材として植物、動物がいるが、植物といっても食べる植物だけでなく見る植物もある。動物も同様で肉、卵、牛乳等を扱っている。これらは普通高校では想像できない内容になっており、ゆえに三本木農業高校特有の伝統ある教育が築かれているものと考える。最近では、小学校でも食育が取り上げられているが、三本木農業高校の教育そのものが、人間の全てを育てているといっても過言ではない。

したがって、現在の三本木農業高校の教育の全てを引き継ぐべきであり、それに加え十和田西高校、六戸高校の提案を取り入れて太い幹とし、それが新しい学校の特色になってほしいと考える。繰り返すが、三本木農業高校にはこういう機会を利用して、普段行っている教育活動をＰＲしてほしいと感じた。

○　三本木農業高校で、日々実践されている教育活動は素晴らしいものがあると感じている。この場では、学習指導要領や教育課程では位置付けられていない特色あるものを資料として掲載いただいたものと思う。

○　統合校は農業科４学科を維持し、普通科２学級が新たに設置されることになる。各校から提案された教育活動のうち、特に十和田西高校、六戸高校が提案したものは、どの場面で実施しようとしているのか。農業科の内容に盛り込むものではないように感じる。普通科の教育活動に取り込んで実施しようとしているのか、または、普通科と農業科全体の活動として実施しようとしているのか、新しい学校の全体像が見えてこない。具体的に農業科、普通科のどちらで取り組むのか、仮に普通科で取り組むとすればどの場面なのかといった点が見えづらいので伺いたい。

○六戸高校（吉田委員）資料では総合的な探究の時間を例として挙げている。六戸高校では、六戸町と北里大学と連携して教育活動を展開している。この探究活動において、教材を自然環境とし、その中で人間としての在り方を深めていく活動に充てたいと考え展開している。教育活動には、リニア（直線的な）の時間とサイクルの時間の両方の考え方があると思うが、農業だからこそ自然の営みの中で１年のサイクルの中で考えることがあるだろう。このように、農業の環境で生徒を指導している先生方のノウハウや知恵が新たに加わると感じている。

したがって、できるのであれば、普通科の総合的な探究の時間で取り入れていただき、その中に農業を指導している先生方に加わっていただければと考えている。広い地域で多くの人が関わることによりグレードアップすると確信している。一つだけでも具体的なもので進められると良い。

○十和田西高校（齊藤委員）十和田西高校で提案した引き継ぐべき教育活動は、週に１時間ないし２時間、総合的な探究の時間に取り入れることが可能だと考えている。

また、どこまで組み入れるか具体的な設計はできていないが、観光科の特別な科目として実施しているものは、普通科の選択科目として２年次から取り入れることができるだろう。今後検討していく中で、どこまでできるかという具体的な議論になると思われる。

②上北地区統合校の新たな特色ある教育活動

■　委員から次のような意見があった。

○　六戸高校の生徒が六戸町の秋祭りに流し踊りで参加し、ボランティアとして各町内に派遣され活動をしているが、六戸高校がなくなって祭りにも参加しない場合、地域にとって失うものが非常に大きいと思う。

他の委員から発言があったとおり、統合校の活動フィールドとして、エリアを上十三地域で捉える方向であるという視点からすると、六戸町だけではなく上十三全域を睨んで活動してもらいたい。例えば祭りに参加するとしても、統合校が十和田市にあるからといって、十和田市秋祭りに限定するのではなく、幅広い視野をもってボランティア活動をしてもらいたい。

○　私は三本木農業高校が所在する高清水地区でグループホームを運営しており、また地元小学校のＰＴＡ会長も務めている。その中で、少子高齢化の問題が大変気になっている。本当に子どもの数が少なくなっており、これから超少子高齢化の時代が来ると考えている。

これからを生きていく子どもたちにはこの問題を知ってもらうことが必要である。農業等ももちろん大事であるが、人口減少については、解決策を高校の時から考えていただきたい。

現在、十和田市の人口は６万人であるが、私の計算上では１日におおよそ２人程度減っており、１年間で約７００人、１０年間で約７，０００人減り、単純計算ではあるが１００年後には人口がなくなる状況になる。私の施設に１０１歳のおじいさんがおり幸せそうに暮らしているように見えるが、我々が高齢になったとき、若い世代がどう対応してくれるかが不安であり、子どもたちには少子高齢化の問題を解決しながら、勉強に励んでもらいたい。

○　今の２人の委員の意見に賛同する。上十三、あえて言えば県南の幅広い地域を対象に教育活動を展開していくことがあるだろう。

今後人口減少が進んでも農業は潰れないと思う。たとえ農業者が１０分の１に減ったとしても農業は潰れないだろう。ただ農村が潰れるということを考えた時に、どのように３年間の学校教育の中で地域思いの子どもたちを育てていくかを考えることが必要だろう。それについては、統合校特有の育て方を示せれば良いと期待する。

また、一般的に定年は６０歳だが、地方の農業従事者には７０代や８０代もいる。そのため、農業関係者は８０歳定年という考えで良いのではないか。こ

のような環境の中で、農業や農村を守ってもらうために３０歳くらいまでは幅広く都市部で勉強して、３０歳ごろに地域に戻ってきて就農すれば良いと考えている。その点で、これからの農業者は１００％大学へ進学させる、そして、統合校に入学すれば必ず大学進学ができるというように、大学進学とスポーツを大きな目玉にできれば良いと考えている。

■　委員長から、３校の特色ある教育活動を引き継ぎながら、充実した教育活動を展開できるよう、当委員会における意見を総合的に勘案しながら、来年度三本木農業高校に設置する開設準備室で具体的な検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（２）普通科と農業科の連携の方向性について

■　委員長から事務局に対し、普通科と農業科の連携の方向性に係る意見交換の進め方等について説明を求め、事務局から資料３により説明した。

■　委員長から委員である各校の校長に対し、各校から提案のあった「普通科と農業科の連携の方向性」について資料３により説明を求めた。

〇十和田西高校（齊藤委員）本校に設置されている観光科は全国でも珍しい学科であり、大きな括りでは商業科に属する学科である。この学びを引き継ぐならば、６次産業化の視点に立った教育活動が可能になると考える。現在も三本木農業高校では販売実習を行うなど素晴らしい取組をしているが、商業の科目を通じて、どうやって売れば良いか、どこに行って何をするべきか等について探究することも考えられる。

また、ここ数年、三本木農業高校の田植えの時期に本校からは一つの学年が参加しており、生徒たちにとって非常に良い機会になっている。自然体験は普通科では通常取り組まないことであり、体験した生徒の人生に良い影響を与えるものと思う。広大なエリアで自分たちが実践していく中で感じるものがあれば良い。

普通科と農業科が一緒になるということは、従来であれば、お互いに別々の学校で行われてきたことについて、すぐ近くで見ることができるということであり、希望によっては、どちらにも関連する進路へ進めるということである。大学進学は、普通科において一つの大きな目標となっているが、その部分を相互に見たり聞いたり、経験し合いながら進めていくことができるようになることを期待している。

〇六戸高校（吉田委員）先ほど申し上げたことと同様になるが、普通科と農業科の連携により、今の子どもたちに必要とされるものの考え方や見方について、人間も自然の一部であるが、その原点に立ち返った形で子どもたちが学習できるのではないかと考えている。そのためには、多くの経験を積まれた農業の教

科指導の実践者である先生方の知恵が是非必要だろう。普通科であれ他の学科であれ、そのことは必要になるだろう。

〇三本木農業高校（遠藤副委員長）これまで十和田西高校、六戸高校とは行事等で本校と連携している。農業をベースとしたものであれば、田植えもあるが、プロジェクト研究発表会など農業教育のメリットを生かして普通科と連携をしていきたい。また、普通科と農業科の垣根のない進学指導についても、連携できるものを進めて行きたい。本校で実践している農業教育をベースに、観光農業や、助ける農業である「援農」等、新しい普通科の中で農業科の学習を入れ込むことも大事である。教頭や教務主任を中心に取り組むことになるかと思うが、作業部会で精査していく必要がある。

さらに、先程の「新たな特色ある教育活動」の項目に戻るが、農業後継者や農業関連産業従事者を育てるためには、上級学校と連携することが必要だと考えている。四年制大学進学に向けた取組も視野に入れながら、後継者を育てるという意味では、青森県営農大学校と連携しながら、農業科の部分もパワーアップさせつつ、普通科の部分もこれまでにない普通科を作る、そういう方向性を目指すべきではないかと思っている。現在、本県においても県教育委員会と青森県営農大学校との間で１名人事交流をしているが、熊本県では５名の教員が派遣されており、教員も生徒も成長していくスタイルを取っている。

これまでにない特色ある教育をしていくためには、青森県営農大学校や農学部のある大学等と連携をしながら、これまで以上のことに取り組んでいく必要がある。

■　委員から次のような意見があった。

〇　我々は委員の立場で統合校に対して意見を出しているが、最終的には県教育委員会が統合校でどのような人財を育てるかという特別な対応が必要だと考える。現場では、教員と生徒が一緒に学校を作っていくことになるが、行政として統合校に特別なテコ入れを考えているのか。すぐできなくても「このような学校にしていきたい」という思いを事務局から示してほしい。

→（事務局）具体的な予算措置や人的配置についてはともかくとして、普通科と農業科の統合の最大のメリットは学校のスケールが大きくなることであり、普通科教員、例えば英語科、国語科などの教員が増員される。また、観光に関する学びを引き継ぐのであれば、商業科の教員も増員される。教育は人から人へ行われるものなので、教員の増は大きな意味を持つと考えられる。

例えば、現在インバウンドとして外国から観光客が来ているが、上北地区統合校の近くには、奥入瀬、十和田という大きなリソースがある。そこにどのように人を呼び込むかは商業科のノウハウによる。それと農業科がどうコラボレーションするかについては、これからの統合校の学校づくりのアイディアによると思われる。あるいは、大学進学についても、例えばこれまで小論文を指導

していた先生が２人から４人に増えた場合、どのような展開が生まれるか。大学のＡＯ入試という人格、活動重視の入試スタイルに国語教師がどう関わるか。もしかしたら、これまでの指導が広く展開する形になるかもしれない。

したがって、これまでの専門高校とは別の大きな流れが来るという未来志向を持って捉えている。決してこれまでを否定するわけではないが、今の小・中学生が望むような新しいスタイルの学校になることを考えることがこれからではないか。人が増えるということはそのような可能性があると考えられる。決して確約できるものではないが、少なくともそのようなイメージを持って未来を展望している。

■　委員長から、当委員会からの意見を踏まえ、統合校の普通科と農業科の連携促進が図られるよう開設準備室において検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（３）部活動の方向性について

■　委員から次のような意見があった。

○　学校規模が大きくなることで部活動の選択肢が増えるのは良いことだ。三本木農業高校の部活動はそのまま引き継いでもらえれば良いと思うが、新規に部活動を作るよりは、道具や指導者についても確保が比較的容易であると思うので、例えば、六戸高校のゴルフ部、十和田西高校の空手道部など、現状の部活動はできれば引き継いでもらいたい。ただ、弓道部であれば弓道場がないなどの問題があるかもしれない。卒業生からすると、自分が所属していた部活動がなくなると寂しく感じる。かつて六戸高校にも空手道部があったが、なくなるときは私のところへも強い存続要望があった。入部を希望する生徒がいない場合は仕方がないと思うが、物理的、金銭的に可能であれば、とりあえず引き継いでもらいたい。

■　委員長から、部活動については生徒のニーズに応じて対応することとし、開設準備室で具体的な検討を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（４）統合対象校間の連携の方向性について

■　委員から次のような意見があった。

○　普通科を中心に教育課程を組んでいくことが重要だと思うので、できれば今年度中から検討を進めてもらいたい。例えば、引き継ぐべき教育活動として現在の観光科の活動を挙げたが、実際に時間数として確保できるのか、ボランティア活動にしても六戸町まで行くとすればどの程度時間を要するのかなど確認する必要があるため、今のうちから具体的な検討を進めるべきである。

○　募集停止後は年度毎に学年が少なくなり、学校の活力が失われることを危惧している。その中で、部活動は生徒数の減少に応じて減らさざるを得なくなるが、子どもたちが望む活動を継続させたい。例えば、この秋から六戸高校の硬式野球部が三本木農業高校と合同チームで活動することとしているが、同じような形で３校が連携して活動できれば良いと考える。

○　現在の田植えだけでなく、例えば、部活動や生徒の研究発表会など様々な場面で可能なところから取り組めれば良い。
　また、令和３年度から統合校において普通科の生徒が募集となり、その年から六戸高校と十和田西高校が募集停止となるが、この状況は令和４年度も続くことから、連携に関する取組が単年度で終わらないよう、六戸高校と十和田西高校に在校生がいるうちは継続できれば良い。

■　委員長から、教育課程の検討や部活動、学校行事など、生徒のことを考えながら３校の連携を進めていく旨確認し、委員から了解された。

（５）校名案の方向性について

■　委員長から事務局に対し、第１回開設準備委員会の状況等について説明を求め、事務局から資料５により説明した。

■　委員長から各委員に対し、「新しい校名にするのか」、「統合対象校の校名を引き継ぐのか」という視点で校名案の方向性について協議するため意見を確認したところ、次のような意見があった。

○　校名案の方向性について、学校関係者等に意見を伺ったが、具体的な案はなかった。したがって、現在の「三本木農業高校」で良いという空気があることをお伝えしておく。

○　前回委員会以降、私もインターネットで校名の状況について調べた。現在の校名は地名が入っていることから、「十和田高校」、「十和田東高校」、「三本木実業高校」、「十和田農業高校」など色々考えたが、やはり１２０年以上の歴史を考えると「三本木農業高校」が良いのではないか。同窓生の意見を聞いたが、名前を変えるのは重いという意見があった。三本木農業高校は青森県農学校から始まったことからも、「農」の言葉は外すわけにはいかないだろう。普通科が新設されるが、これからの時代に農業は大事だろうということで私の意見としたい。

○　もし校名を検討するのであれば、六戸高校としては、新しい校名としていただきたい。十和田市を含めたこの地域は新渡戸家による開拓ということもあるので、例えば、「三本木アグリフロンティア高校」とするのはどうか。３校の

校歌に「開拓」を意味する言葉が入っているので、「フロンティア」は入れてほしいと思う。それに農業を加えるものである。

校名案は私だけの意見なので、各方面から意見を伺い、もし新しい意見があれば次回改めて提出することとしたい。

○　私も外郭団体関係者のうち可能な範囲で聞いた。私の意見を含め、統合校の校名は新しいものを考えていただきたい。三本木農業高校の歴史も大切だが、校名を引き継がれると吸収されるイメージとなる。３校統合による校名を新しいものにすることで、新しい時代に合った教育を考えるチャンスになる。

ただし、三本木農業高校の歴史を考えると、三本木という名称が残ることは問題ないため、「三本木〇〇高校」とすればどうか。同じ開拓精神ということについては３校に共通している。また、３校に共通しているのは奥入瀬川や開拓精神の象徴である稲生川があることから関係する文字を入れてはどうか。例えば、三本木の後に開拓の「拓」、稲生川の「生」を入れ、「三本木拓生（たくせい）高校」はどうか。

○　校名の考え方の一つとして、どこの学校かが分かるのが良い。「十和田」は範囲が狭いように思うので、三本木原台地に根付いた学校ということで「三本木」という名称は残っても良いのではないか。また、農業の拠点校の意味合いもあるので、「農」の言葉はあっても良い。これから教育課程や理念を生かしていくことを考えると、これに何か付け加えることが考えられるのではないか。三本木農業高校のＯＢからすれば、そのままでも良いという意見になると思うが、そのことについては、慎重になる必要がある。「三本木」と「農」が残れば、通称が「三農」となり、これまでの１２０年の歴史を踏まえつつ全国的にも知名度が高い「三農」であることはフォローできるのではないか。

○　統合校の校名については私自身大変悩んだところであり、様々な方から意見を伺った。三本木農業高校を卒業し各種方面で活躍している方々からも意見を伺った。「三本木農業高校」の名称を引き継いでほしいという気持ちがあるが、これからの子どもたちが入りやすい、選びたいという気持ちになる校名にした方が良いのではないかとの意見もあった。一本に絞りきれない思いがあった。「三本木農業高校」という名前を残したいが、吸収されることには残念な思いもあるため、これらの思いをどう上手にミックスしていければ良いのかと考えると、例えば「三農」の下に何か付け加えることはできないか。そうすると新しいスタートになるのではないか。

その一方、校名を変更すると予算がかかることも懸念されるところであり、絞りきれないというのが正直な気持ちである。

○　私は「三本木農業高校」が良いと思う。三本木という名称は三本木原という意味だったが、イメージを変えて、十和田西高校、六戸高校、三本木農業高校

をそれぞれ一本の木と見なし、それらが集まって三本木ということで発想を変えればどうか。「三本木農業高校」とすると吸収されるイメージがあるとの意見もあるが、実際のところはどのようなことなのか分かっていると思う。

子どもたちが新しい校名を望むのか。これは学校の先生方から聞かないと分からないが、現在の生徒が入学した時に、保護者は１２０年の歴史のある三本木農業高校だから進学させているのであり、生徒たちもその誇りを持っている。これから入学してくる生徒には歴史と伝統、貫禄のある「三本木農業高校」がふさわしいと考える。

○　今回求められている意見としては、新たな校名にするのか、既存の校名を引き継ぐのかであるが、結論から言うと引き継ぐ方がメリットがあると考える。しかし引き継ぐにしても、教育目標、校訓、教育課程を含め、高校が変わったことをきちんと見せながら、ダイナミックに変えていかないといけない。校名を引き継ぎながらも、教育内容の充実に努めなければならないと考えている。

○　新しい校名を考えていたが、「十和田高校」、「奥入瀬高校」、「稲生高校」ぐらいしか思いつかず結論が出なかった。しかし、ただ単に現在の校名を使うと異論が出るかもしれない。そのため、結論が出なかったというのが私の意見である。

■　事務局から、委員の意見としては両論あったため、次回委員会までに文書で具体的な校名案候補とその理由について照会し、その結果を次回委員会の資料とすることを説明した。

■　委員長がオブザーバーに対し、第３回委員会の開催に向けて、校訓、校章、校歌、制服などの資料作成に協力を求めた。

４　閉会